

C型慢性肝炎のインターフェロン・リバビリン療法における 人参養栄湯併用の意義

○元雄 良治、毛利 久継、大坪公士郎、藤井 保治、山口 泰志、渡邊 弘之、
澤武 紀雄

金沢大学・がん研究所・腫瘍内科

【目的】C型慢性肝炎に対する新しい抗ウイルス治療としてインターフェロン(IFN)・リバビリン(Riba)療法が登場したが、リバビリンの副作用として溶血性貧血がある。一方、人参養栄湯にはC型肝炎ウイルス(HCV)に対する抗ウイルス作用の他、抗酸化作用、免疫賦活作用などがある。とくに抗酸化作用による赤血球膜保護作用が推測され、溶血性貧血防止の意義があるのではないかと想定し、IFN/Riba療法における人参養栄湯併用の効果を検討した。

【対象と方法】C型慢性肝炎患者を無作為割付けにて2群に分け、A群はIFN/Ribaの2者投与群、B群はIFN/Riba/人参養栄湯の3者併用群とした。IFNはIntron A 10MUまたは6MUを、2週間連日投与後、週3回筋肉内注射、Ribaは体重60kg未満は600mg、60kg以上は800mgを連日内服、人参養栄湯は9gを連日内服にて、計24週間投与した。

【結果】登録症例はA群8例、B群8例の計16例で、男性12例、女性4例、年齢は26～66歳(平均51.3歳)、HCVセロタイプ1:11例、セロタイプ2:5例であった。肝生検は8例に施行し、F1:5例、F2:1例、F3例2例であり、5例にIFN治療歴(単独治療)があり、再燃3例、無効2例であった。投与4週目の血中Riba濃度は10例で測定し、2000ng/ml未満4例(A群2例、B群2例)、2000以上3000ng/ml未満3例(A群0例、B群3例)、3000ng/ml以上3例(A群3例、B群0例)であった。投与開始から24週以上経過したのは8例で、副作用などのため投与中止が4例(A群2例、B群2例)みられ、中止理由は皮疹1例(A群)、貧血・血小板減少1例(B群)、食欲不振・全身倦怠感1例(A群)、漢方薬服用拒否1例(B群)であった。投与終了時(24週目)でのGPT正常化は、A群4例中3例、B群4例中3例、HCVRNA陰性化は、A群4例中3例、B群4例中3例であった。投与終了後24週まで経過観察し得た5例のうち完全著効は、A群3例中2例、B群2例中0例であった。一方、貧血の程度ではヘモグロビンの最大低下値(投与前値と最低値の差)がA群 2.1 ± 2.3 (mean \pm SD)g/dl、B群 2.9 ± 1.7 g/dlと両群間に有意差はなかった($P=0.46$)。

【結論】C型慢性肝炎のインターフェロン・リバビリン療法における人参養栄湯併用の意義を無作為割付け群間比較にて検討した。現時点では抗ウイルス効果や貧血軽減効果に有意差は出ていないが、今後さらに症例を重ね検討していきたい。